

哀歌 3 章 55～57 節

ルカによる福音書 8 章 40～56 節

「娘よ、起きなさい」

<二つの物語>

今日の聖書には、二つの出来事が語られています。一つは、会堂長ヤイロの、死にかかっている 12 歳の一人娘の出来事。そしてもう一つは、その途中で割り込むように語られている、十二年出血が止まらない病で苦しんでいた女の出来事です。

先週は、この女の出来事についての御言葉を聞きました。語られていたのは、イエスさまが本当の救いをもたらして下さる神の御子である、ということです。

つまり、イエスさまは、まず女の血が流れ続ける病を癒し、命が尽きていくのを食い止めて下さる命の主、神の力を持つ方であることが示されました。しかも、女の病を癒すだけでなく、女を呼び出し、語りかけ、関係を築いて下さった。そうして、イエスさまを信じ、イエスさまと交わり、イエスさまと共に生きる人生を与えて下さったのです。神と共にあることこそ、まことの人間の回復であり、救いであり、平安なのです。

<ヤイロの気持ち？>

しかし、この女の救いの御業が行われている一方で、もう一つの物語が進んでいました。そもそもイエスさまは、死にかかっている 12 歳の一人娘のために家に来て欲しい、という会堂長ヤイロの願いを聞いて、その家に向かっておられる途中でした。

12 歳といえば、ユダヤ人の社会では、男子は翌年 13 歳で成人するので、その準備をする年齢。女子は、結婚が出来るようになる年齢です。

その年になるまで、大事に育てた一人娘。その子が死にかかっている。会堂長ヤイロは、すでにあらゆる手を尽くしたに違いありません。それでも、もう駄目だ、という時に、イエスさまがゲラサの地方から帰って来られた。この方なら、娘を助けて下さるかも知れない。ヤイロは必死の思いで、イエスさまの足もとにひれ伏し、自分の家に来て欲しいと願ったのです。

一刻も早く、娘のところに来ていただきたい。しかしその道中で、ひと騒動が起きました。出血が止まらない女の出来事です。

彼女は、イエスさまを取り巻く群衆の中で、イエスさまの後ろからこっそり服の房に触れました。するとただちに癒されたのです。イエスさまはそのことに気付いて、「わたしに触れたのはだれか」と言って、この女を探し始めました。そして、御前に出てきてひれ伏した女と、会話をなされたのです。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」慰めと祝福の言葉と共に、女を送り出されたイエスさま。

しかし、ヤイロはこの時、どういう思いでこの状況を見つめていたのでしょうか。一分一秒でも早く娘のところに来て欲しいのに、邪魔しないでくれ！と、ヤキモキ、イライラしたのでしょうか。あるいは、女の癒しを目の当たりにして、やっぱりこの方は本当に救い主だ。娘もきっとこの偉大な力で助け出して下さるに違いないと、むしろ希望を持ったのでしょうか。

しかしそこに、ヤイロの家から人が来て、こう告げたのです。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」

家からの使いの人は、「この上、先生を煩わすことはありません」と言いました。

さすがに、噂のイエスさまでも、死んでしまっただけでは手の出しようもない。生きていれば、癒して頂けたかも知れないが、死んでしまっただけでは、もう誰の力も及ばない。今から来て頂いても意味がない。

人々は、イエスさまに対して、病を癒して下さることは期待していましたが、死んだ者を甦らせることは全く期待していませんでした。それほどに、死は絶対的な力を持っています。

ヤイロも、そうだったのではないのでしょうか。死の知らせは、絶望の知らせです。とうとう、一人娘は死んでしまった。死に捕らえられてしまった。生きてさえいれば、どんなに小さくても望みはあるけれども、もう、あらゆる可能性が閉ざされてしまった。父親は心が引き裂かれる思いだったに違いありません。

でもそこで、イエスさまがヤイロに語りかけられます。

「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」

イエスさまは、一人娘が死んでしまった知らせと一緒に聞いておられました。そして、会堂長ヤイロが、娘を失ってしまった恐れと悲しみに取りつかれていることを、よくご存知でした。だからそのヤイロに向かって、「恐れることはない。」と言われたのです。そして、「ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」と言われました。

ヤイロは、このイエスさまの御言葉をどう聞いたのでしょうか。いや、死んでしまっただけでもう無理です。そんな風に思ったのでしょうか。もしくは、まさか、死んでもこの方は助けて下さる力があるというのか。そんなわずかな望みを抱いたのでしょうか。

しかし聖書は、ヤイロが「信じます」と答えたか、「いいえ、まさか」と答えたか、そのことは何も教えていないのです。

<イエスさまが>

今日の聖書の中では、ヤイロにとって色々な出来事が起こりました。しかし実は、最初にイエスさまの足元にひれ伏して、「自分の家に来てくださるように」と願ったことと、最後に娘が生き返って非常に驚いた、ということ以外に、ヤイロの気持ちや言葉は語られていません。

でもわたしたちは、その場面、場面で、ヤイロに様々な感情や思いが渦巻いたろう、ということは、想像出来るのではないのでしょうか。わたしたちの日々にも、そのような場面が

あるからです。どれだけ不安になったか。どれだけ焦ったか。どれだけ期待したか。どれだけ希望にすぎたか。どれだけ絶望したか。どれだけ悲しく、恐ろしかったか。

わたしたちの心は、色々なこと、色々な場面に振り回され、揺り動かされ、コロコロと変わります。わたしたちの思いで、心の中で、揺り動かされない確かなものは、何ひとつありません。ひと時は、自分の中の確固たる、確かな思いだと信じて、それは何かの拍子にポキッと折れたり、崩れたりしてしまいます。希望と絶望を行ったり来たりします。

わたしたちが「信仰」だと思っている自分の思いも、そうです。この方を信じている。この方にわたしは従っている。確かな思いでそう思うこともあれば、信頼しきって委ねることが出来ない。わたしには信仰なんてない。そんな風に、心が乱れて、どうしようもなく思うこともあるのです。

でも、このヤイロの場面において、聖書はヤイロの思いを語りません。語られているのは、「イエスさまが」何を言われたか。「イエスさまが」何をなさったかです。

イエスさまの御言葉。イエスさまの御業。ただこれだけが、恐れの中でも、絶望の中でも、唯一確かなものです。ただこれだけが、揺らぎなく立つものです。

ヤイロが直面した一人娘の死。どれだけ死の強さに打ちのめされ、どれだけ人間の無力さを感じたのでしょうか。どれだけ心が掻き乱され、どれだけ足元が崩れるような思いをしたのでしょうか。

しかし、その死に打ち勝つことが出来る方が、ただ一人おられます。神の御子、イエスさまです。今日の聖書の箇所は、まさにイエスさまが命の主であることを伝えていています。わたしたちは、この方にすべてを委ね、頼るしかありません。ボロボロの心も、自分の破れかぶれの思いも投げ打って、今日の前において下さるこの命の主に、「恐れることはない。ただ信じなさい」との御言葉に、ただすがるしかないのです。でもイエスさまは、「そうすれば救われる」と言って下さいました。

これは、「信じる」という自分の確固たる思いがあれば、救われる、と言っておられるわけではありません。無力の中で、弱さの中で、自分には何も出来ない中で、ただイエスさまの御言葉を聞くこと。そのイエスさまがなさって下さる御業に、委ねること。そうすれば、恵みを受け取ることが出来る。救いが与えられる。そう言って下さるのです。

ヤイロもまたそうでした。イエスさまの足もとにひれ伏し、娘の癒しを願ったヤイロは、もはやイエスさまに頼るしか方法がなかった。イエスさまの癒しの御手に、娘の生死を賭けるしかなかったのです。そして、娘の死の知らせを聞いた後も、イエスさまが語って下さった御言葉にすがるしかなかった。それでも家に向かって下さるイエスさまに、付いて行くしかなかったのです。

それこそ、それは「信仰」というようなものではなかったかも知れません。でも、今ヤイロが出来ることは、イエスさまの御言葉を聞き、イエスさまの御業を待つことのみです。

でもその時、ヤイロの人生、わたしたちの人生の主語が、「わたし」から「イエスさま」に変わります。わたしが何かを語り、何かを考え、何かをする人生ではありません。わたしたちは何を語ることも出来ず、何を成すことも出来ない。しかし、わたしの人生に、イエスさまが共にいて下さり、イエスさまが御言葉を語って下さり、イエスさまが御業を行なって下さるのです。なす術もないわたしの人生の主導権を、命の主であるイエスさまが握って下さり、確かな道へと導いて下さるのです。

イエスさまを主として歩む人生。それが、信仰の歩みです。そしてそれが、人間のまことに幸いな、神と共にある歩みです。イエスさまにこそ頼るなら、イエスさまはわたしたちの錯乱した思いも、あやふやな信仰も、恐れも、絶望も、死も、すべて受け止め、共に歩んで下さり、御言葉を語りかけ、救いの御業を行なって下さるのです。

### <命の主>

さて、イエスさまは家に入り、娘の手を取って「娘よ、起きなさい」と呼びかけられました。すると、娘はすぐに起き上がったのです。

仮死状態だったのが蘇生したとか、実は死んでいなかった、というわけではありません。人々は、悲しみの只中で、死んだのに、「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」と言ったイエスさまをあざ笑ったほどでした。

イエスさまは、実は少し心臓はまだ動いているよ、という意味で「死んだのではない」と仰ったわけではありません。確かに死んでいるのです。

しかし、今ここに、神の御子であるわたしが来た。死んだ者に命を与え、起き上がらせる命の主、神の独り子が来た。わたしは死の中から目覚めさせることが出来る。娘は、あなたたちが思うような、滅びの死に捕らわれて、葬られなければならないのではない。わたしによって、また生きることが出来る。起き上がる事が出来る。あなたたちは泣くのを止めることが出来る。そういう意味で、「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」とイエスさまは言われたのです。

そして、イエスさまは呼びかけられました。「娘よ、起きなさい。」人がどうしようもないところから、誰にとっても不可能だと思われるところから、イエスさまは、起き上がらせて下さいます。自分の力では、人間の力では起き上がれない状況でも、たとえ死の中からでも、神の御子、命の主であるイエスさまが共にいて下さるなら、「起きなさい」との御言葉を下さるなら、起き上がる事が出来るのです。

### <十字架と復活>

娘の両親は非常に驚いた、とあります。イエスさまは、このことをだれにも話さないようにとお命じになりました。それは、今この時点ではまだ、この出来事の意味を、人々が正しく理解することが出来ないからです。

これらの出来事は、イエスさまが十字架の死によって罪を贖い、神さまとの交わり、神さまを主人とする正しい関係を、回復させて下さること。そして、復活の御業によって、わたしたちに永遠の命と、復活の約束を与えて下さることの先取りです。

人々はこの後、イエスさまの十字架の死と復活の御業が成し遂げられた時に、これらの出来事が、イエスさまがまことに神の御子であること、救い主であることのしるしであり、証しであったことを知るのです。

イエスさまは、すべての者の罪を赦し、神さまとの交わりを回復させるために、神さまと共に生きる者とするために、まことの人となってこの世に来られました。そして、十字架の死によって、ご自分の命によって、わたしたちの罪を贖い、神さまと和解させて下さり、救いの御業を成し遂げて下さいました。このイエスさまを、父なる神さまは死者の中から復活させ、イエスさまを信じる者に、永遠の命を与えること、終わりの日に死から復活させて下さることを、約束して下さいましたのです。イエスさまを信じて眠ったすべての者は、終わりの日、「起きなさい」との命の主の呼びかけを聞くのです。

今も、わたしたちは相変わらず、神さまに逆らい、神さまの交わりから遠ざかってしまう者です。そして、今も相変わらず、わたしたちには圧倒的な死の力が突き付けられます。

でも、わたしたちはここでこそ、十字架と復活のイエスさまの、「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば救われる」との御声を聞くことが出来るのです。

わたしたちは、目の前の現実苦しむし、悩むし、恐れもするし、泣いたりもします。でも、イエスさまが来て下さり、御言葉を下さり、共に歩いて下さる。罪も死もすべて担って下さり、すべてに勝利して下さいました方が、いつもわたしと共にいて下さる。わたしたちがどんなに揺らいでも、不安でも、恐れても、この方だけは確かです。「恐れることはない。ただ信じなさい。」この主の御言葉だけは確かなのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまが、わたしたちのために来て下さり、交わって下さり、語りかけて下さり、共にいて下さいますことを、感謝いたします。

この方がおられる。この方と共に歩むようと、わたしたちは招かれています。わたしたちは、本当に揺らぎやすく、弱く、無力で、自分で立つことも、起き上がることも出来ません。しかし、苦しみに悩みに罪にも死にも、十字架と復活によって勝利して下さいましたイエスさまが、「恐れることはない。ただ信じなさい」と、語りかけて下さいます。「起きなさい」との御言葉を下さいます。ただこの確かな御言葉によって、生きる者として下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン